

「人間学」を考える

井ノ川 清

はじめに

今日「人間学」と言うと評判が悪い。オゾン層の破壊、地球温暖化現象、生態系の狂い等々、即ち一言に言って地球環境の破壊を惹き起したものが他ならぬ人間であること、そしてこの人間の行動態度の背景に「人間主義」の思想が有るからだと思なされているからである。

人間も自然の一部である。この人間が自然を超出し、自然を対象的に把えて、自然を略奪し、利用し尽し、自然に対して人間を優位に置く思想、これは主に二つの源泉に基いている。

ひとつがキリスト教思想である。この思想では人間は神に愛でられし者で、神の姿に似せてつくられ、万物は人間のために人間に利用されるように神によって配慮され創造されたとする。牛や豚や羊も人間に食せられるように神によってつくられた。牧羊犬も人間のために羊を導く。この視点に立つと、なるほどすべての存在者は人間の便役のために存在するようになってくる。かつて、地震、暴風雨、大洪水、ハリケーンなど自然の猛威は人間を苦しめた。人間は自然と闘争しなければならなかった。人間は自然によって翻弄された。この時現われたキリスト教思想が、人間を神によって自然に対して優位に立つものとして描出したことは、人間をほっとさせたことであろう。人間は勇気を得た。しかし次第に人間は自分が自然の一部であることを忘れて自然を支配し征服しようとするに至った。

この思想の第二の源泉は科学技術の一面的発達である。たしかに科学技術は、人間に便利さを提供し、人間を豊にした。しかしそのマイナス面も大きい。原子爆弾がその象徴的意味を代表する。青い美しい地球は崩壊寸前である。このことの哲学的意味はハイデッガーによって良く言い表わされている。ハイデッガーは近代科学の本質を、世界を像として把え、人間がズブエクト

となり、世界を支配征服しようとするのを特長とするものであると考察し批判する。ハイデッガーは言う。

「人間の能力の領域を、すべて存在するものを支配するための基準と実行の場処として占拠する、あのような人間の在り方が始まるのです。」(『世界像の時代』)

ハイデッガーはソクラテス以後ヨーロッパの二千年の歴史は存在するものの「存在」そのものを忘れてきた「存在忘却の歴史」であったと断じ、自分こそがこの歴史を一大転回し、人間主義を克服し得たと確信しているのだが、彼が存在するものの「存在」そのものの声に耳を傾けるものはすべての存在者の中で人間であるとし、人間を他の存在者から浮き上らせて、ダーザイン(現存在)と呼んだことはいかにもヨーロッパ人らしい人間主義の立場を継承しているといつて良いだろう。なぜなら人間主義の立場は、「人間にとっては、人間が存在する限り、人間の問題が最重要課題になるのであり、思考の基点を人間そのものの土台に置く」というものであるからだ。

今日論壇では「人間主義は消滅した」と言うことが流行となっており、甚だしきは「美しい地球を残すためには人間などは消滅してしまった方が良い」などと情緒的感傷的発言をするものさえでてきている。美しい自然も地球も人間にとっては人間が存在する限り意味を持ち重要性を持つ、というのが人間主義の立場である。美しい自然も地球も人間が消滅してしまつては何の意味を持つだろうか。たしかに人間も自然の一部である。自然が破壊されれば、人間も存立しえないことはたしかである。だからこそ破壊した自然を取り戻そう、それを今後は出来る限り損傷しないで回復させよう、それができるのも人間だけなのだというのが人間主義の立場である。人間主義は消滅したどころか、今後益々強調されなければならない思想なのである。例えば自動車の排気ガスによる大気汚染は人類にとって危機一発のところきている。しかしクリーンなエネルギーを発明しこれを使用するように努めるのも人間にかかっているのだ。人間は木材を濫伐した。そのため砂漠化が生じた。しかしこの砂漠を緑化しようとするものも人間なのだ。

「人間とは何であり、何であるべきか」という問いに対する解答を見つけだそうと永遠に努力し続けていく人間の営為が「人間学」の課題である。この問に対する解答が今日果されてしまったとでもいうのであろうか。「人間学」は今後二十一世紀において、各自がそれぞれの分野領域において探究さ

れ続けていかなければならない人間の営為なのだ。

1. 現代的「人間学」の創始者フォエルバッハ

「人間とは何であり、何であるべきか」という問は古代以来多くの宗教家、哲学者、文学者らによって発せられ、その解答も試みられてきた。しかし現代的意味で「人間学」を概念的に確立しようとしたのはフォエルバッハであった。

「根本命題の課題は、絶対者の哲学すなわち神学から、人間の哲学、すなわち人間学の必然性を導き出し、そして神的哲学の批判によって人間的哲学の批判を基礎づけることであった。」(『将来の哲学の根本命題』)

フォエルバッハは、キリスト教神学の批判とヘーゲル哲学の批判を通して人間学を導き出し、これを確立しようとした。

「近世の課題は、神の現実化と人間化——神学の人間学への転化と解消であった。」(『根本命題』)

「この人間化の宗教的あるいは実践的な仕方が、プロテスタンティズムであった。……それはもう神学ではなく——本質的にキリスト論、すなわち宗教的人間学にすぎない。」(『根本命題』)

フォエルバッハは、神が人間を造ったのではなく人間が神を造ったのだと説くがこのことを少し検討してみよう。

「人間は宗教のなかで自分自身のかくれた本質を対象化する。したがって、宗教は神と人間との対立葛藤から始まるのであるが、その対立葛藤は人間と人間自身との葛藤である。」(『キリスト教の本質』)

フォエルバッハは神とは人間の理性の対象化であると断ずる。

「神とは自己を最高の本質（存在者）としていいあらわす理性であり、自己を最高の本質（存在者）として肯定する理性である。……神は思惟の欲求であり、必要な思想であり、最高度の思惟力である。」(『キリスト教の本質』)

ではなぜ人間は神を造り出したのか。それは神が人間の願望であったからである、とフォエルバッハは述べる。

「神は、人間の原型、典型にほかならず、人間は、そのあり方と本質において、神のようにあるべきであり、またそうあることを欲するか、あるいは少くともいつかはそうなることを望むからである。……神とは人間がそうで

ありたいと願うものである。すなわち、現実的な存在として表象された、人間自身の本質であり、目標である。」(『根本命題』)

このようにフォエルバッハは、神学の秘密は人間学である、としてキリスト教神学から人間学を導き出すのであるが、更に彼はヘーゲル哲学を批判して、これを人間学に解消しようとする。なぜか。

「近世哲学の完成は、ヘーゲル哲学である。だから、新しい哲学の歴史的な必然性と弁明とは、とくにヘーゲルの批判と結びつく。」(『根本命題』)

ヘーゲル哲学も結局は神学に他ならないというのがフォエルバッハの立場である。

「ヘーゲル哲学はさかさまの観念論——神学的観念論である。……「絶対的」哲学の秘密は、だから神学の秘密である。」(『根本命題』)

このようにフォエルバッハはヘーゲルの哲学は人間からかれ自身の本質、かれ自身の活動を外化し、疎外するものだとみる。この点で神学と同様であると批判する。

ではキリスト教神学とヘーゲル哲学から人間学を導き出したフォエルバッハは人間をどのように把握するのか。彼は人間は自然を基礎とし、感性を土台とする存在であると規定する。フォエルバッハは言う。

「思想は感性によって自分が真実であることを実証する。……真理、現実性、感性は同一である。ただ感性的存在だけが、真の存在、現実的存在である。……新しい哲学は、喜んで、意識的に感性の真理を承認する。それは感性的であることを少しもかくさない哲学である。……ただ感性的なものだけが、太陽のように明らかであり、感性が始まる場所のみ、すべての疑いと争いがやむ。直接的な知識の秘密は、感性である。」(『根本命題』)

たしかに人間の認識の源泉を「感性」のみに限定すること、つまり認識の基礎を感官のみに頼るとすることは経験論哲学に対する批判に見られる通り問題が無いわけではない。しかしフォエルバッハの「感性」重視の立場はキリスト教神学やヘーゲル哲学の絶対的理性的観念論の批判を通して導き出されたものであって、当時としては革命的な新しい唯物論の主張であった。フォエルバッハが人間存在を自然主義的感性的存在であると把握したことの意義は十分に強調されてしかるべきものであろう。いずれにしてもフォエルバッハが新しい「人間学」の出発点を切り開いたということは認められるであろう。

2. マルクス主義とフォリエルバッハ

フォリエルバッハが人間を自然主義的感性的存在として捉えたこと、このことがマルクスに大きな影響を与えたことは、エンゲルスの『フォリエルバッハ論』に述べられている。

「われわれはみなたちまちフォリエルバッハ主義者となった。マルクスがこの新しい見解をどんなに熱狂的に迎えたか、またかれが——どんなにそれに影響されていたかは、『聖家族』を読めばわかる。」(『フォリエルバッハ論』)

さて、初期マルクスの思想が哲学的人間学であったことは良く識られている。この頃のマルクスの思想を集約したものが次の言明に良く言い表わされている。

「人間の自己疎外としての私有財産の積極的止揚としての共産主義、それゆえにまた人間による人間のための人間の本質の現実的な獲得としての共産主義。それゆえに、社会的すなわち人間的な人間としての人間の、意識的に生まれてきた、またいままでの発展の全成果の内部で生まれてきた完全な自己還帰としての共産主義。この共産主義は完成した自然主義として＝人間主義であり、完成した人間主義として＝自然主義である。それは人間と自然とのあいだの、また人間と人間とのあいだの抗争の真実の解決であり、現実的存在と本質との、対象化と自己確認との、自由と必然との、個と類とのあいだの争いの真の解決である。」(『経済学・哲学草稿』)

マルクスは最初フォリエルバッハを熱狂的に歓迎したが、まもなくフォリエルバッハを批判する。それはフォリエルバッハの人間把握は一般的普遍的抽象的人間の把握であり、人間を歴史的社会的現実の中で捉えていないというものであった。ここからマルクスは人間を歴史的社会的存在として把握するように追求する。マルクスは哲学的人間学から次第に経済学へと向う。初期マルクスの思想の中にも「社会」の視点が表われてくる。

「自然の人間的本質は、社会的人間にとってはじめて現存する。なぜなら、ここにはじめて自然は、人間にとって、人間の紐帯として、他の人間にたいする彼の現存として、また彼にたいする他の人間の現存として、同様に人間的現実の生活基盤として、現存するからであり、ここにはじめて自然は人間自身の人間的あり方の基礎として現存するからである。ここにはじめて人間

の自然的なあり方が、彼の人間的なあり方となっており、自然が彼にとって人間となっているのである。それゆえ、社会は、人間と自然との完成された本質統一であり、自然の真の復活であり、人間の貫徹された自然主義であり、また自然の貫徹された人間主義である。」(『経済学・哲学草稿』)

マルクスは当時のドイツの国家と市民社会の分裂に着目して、普遍的抽象的な国家と対立する現実的な活動の場である市民社会の構造を明らかにすべく、経済学の研究に没頭していくことになる。このことによってフォエルバッハをのり越えようとした。実際マルクスが人間を単なる自然主義的感性的存在として扱ったフォエルバッハを批判し、歴史的社会的存在として人間を扱えようとしたことは明らかにマルクスがフォエルバッハを一歩超越するもので前進であった。

更にマルクス主義がもうひとつフォエルバッハを批判したのは、フォエルバッハはヘーゲル哲学の「弁証法」という視点を無視したというものである。マルクスはヘーゲルを批判したが「弁証法」は評価した。これを自らの思想に注入した。この「弁証法」が自然の運動に内在した論理であるかどうかということは今日から見れば疑わしく異論のあるところである。従ってこの問題は問題点として指摘して置くだけでこれ以上追求しないでおう。

マルクスが哲学的人間学から経済学へと研究の比重を移したことは、マルクス経済学の誕生という観点からみれば一貫した前進的運動であった。『資本論』がその成果である。しかし「人間学」からみれば、自然主義的感性的人間存在→歴史的社会的人間存在→経済的人間存在→階級的人間存在への移行というように人間存在を、人間の全体的複合的存在からしだいに人間の部分的存在へと狭隘化していくものであった。全体が部分となり、部分が全体を代表するものとなった。人間学は多様に発展する可能性を奪われてしまった。人間存在は多面的多重層的複合的全体的存在である。各専門領域の研究者がそれぞれの分野で「人間とは何であるか」を探究すべきものである。

3. 「階級的」存在は意識を規定するか？

マルクスは『経済学批判』の「序言」の中の有名な唯物史観の公式の中で、「人間の意識がその存在を規定するのではなくて、逆に人間の社会的存在が

その意識を規定するのである。」と述べている。これはマルクス主義の流布の流れの中で「階級的存在は意識を規定する」と一般に宣伝されるものとなった。これを少し考察してみよう。

人間が共産主義者になるのは、その環境的存在のせいだろうか。もし存在が意識を規定するのであれば、世界には労働者の方が資本家より圧倒的に数が多いのであるから、世界はたちどころに共産主義者が充満し、世界はとっくに共産主義社会になっている筈である。また裕福な家庭の出身なのに共産主義者になったり、貧困な家庭の出身者が立身出世して資本家になったりする現象をどう説明するのか。人が共産主義者になるのはその社会的階級的存在によるものだというより、彼が読んだ書物や、熱心で献身的な活動家の影響を受けたり、党の機関紙や印刷物を読んだりする場合の方が多であろう。つまり「存在が意識を規定する」というより、「意識は意識によって規定される」といった方が良い場合が多い。実際ロシア革命の国内戦の時、前線の兵士に武器弾薬を送るのと同じように、パンフレットやアジビラを送るのを、レーニンも重視したほどである。

『経済学批判』の「序言」の公式の中で、マルクスは、「生産諸関係の総体は社会の経済的機構を形づくっており、これが現実の土台となっており、そのうえに、法律的、政治的上部構造がそびえたち、また、一定の社会的意識形態は、この現実の土台に対応している。物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的生活諸過程一般を制約する。」と述べている。この公式の中でマルクスは経済的存在がすべてのイデオロギー形態の土台をなすという意味のことを述べているが、これもよくみれば怪しいものである。経済的存在が土台をなすというより、宗教的存在、民族感情、人種的存在、エートスといったものの方が下部構造をなすといった方が、今日の世界の現状、つまり旧ユーゴー内紛問題や、イスラエルとパレスチナ（アラブ）問題をみる時、適切だと思われる。物質的生産様式が同じ国々でも、その国民感情や宗教的意識は異っている場合が多い。同じ家族で育ち、同じ家に住み、同じ食物を食べて同じ教育を受けた兄弟同志でも異った党派に属し、異ったイデオロギーを持っている場合もある。人間が異った意識を持つのは、その人間の感受性、才能、性格、気質、つまり個性に負うところが多い。存在が意識を規定するというより、意識が存在を規定する、そしてこの意識は他の意識によって影響をおよぼされるというべきである。存在が意識を規定すると決めつけるな

ら、存在を抹殺しなければ社会は変化しないことになる。これはスターリニズムである。意識が存在を規定するという立場をとれば、相手の意識を変えれば、相手の存在も変化する。つまり意識の変革が存在の変革を促すのである。

経済が人間に大きな影響を及ぼすことを発見し強調したことはマルクスの大きな功績であるが、人間学の立場からみれば、マルクスの唯物史観には問題がある。この点、フォエルバッハが人間を自然主義的感性的存在であると規定したことの方がより根底的な把握の仕方であろう。人間の経済的存在様態を発見したことでマルクスは酔いしれてこれを過度に重視しすぎた。経済的存在様態は人間存在の一部分的存在様態である。マルクスはこれをもって人間の全存在様態を把握したと錯覚した。食べるにことかく人間にとっては経済的存在様態がすべてである。しかしある程度物質的条件が満たされれば、「人間はパンのみにて生きるにあらず」ということになる。また少数の人間にあてはまることだが、パンより「自由」を価値あるものと思って生きる人間も存在するのである。

たしかに社会的存在は社会的意識に影響を及ぼす、階級的存在は階級の意識に影響を及ぼす、ということはいえる。しかし社会的存在が意識一般を規定する、階級的存在が意識一般を規定するとは到底いえない。

4. 科学と人間学

現在「人間学」が最も切実に直面し対決を迫られている問題は何か。それは19世紀から急速に進歩発展してきた科学の成果にどう対処すべきかという問題である。

ダーウィンの進化論は人間学に新しい人間観を迫るものであった。神の寵児が実は猿から進化してきたものであることは、まことにショッキングな事件であった。

今日自然科学の進歩によって人間観は大きな影響を受け、人間学は科学と無関係ではいられなくなった。人間学は科学の成果をも包括しなければならなくなった。

医学の進歩とともに、生命維持装置をはずすべきなのか、そうでないのか。人間の尊厳ある死のためには安楽死も認めるべきなのか、そうでないのか。

体外受精児の問題はどうか。臓器移植の許容範囲はどこまでなのか。等々数々の倫理的問題が起きている。

特に分子生物学の発達で、生命が物理化学のレベルで説明つくようになった。DNAの発見とその応用である遺伝子組換えの技術は人間学が取り組まなければならない深刻な問題となってきた。つい最近クローン猿、クローン羊が現われた。クローン人間も出現可能だろう。それは許すべきなのか、そうでないのか。応用は禁じても研究まで禁じることができるのか。科学者の知的欲求は研究をどんどん進めていってしまうのではないのか。遺伝子操作の技術が農業などに向っているうちはよいが、人間にまで向けられたらどうということになるのか。優生学的応用技術は実行してよいのか、悪いのか。これらの問題に人間学は直面している。課題は大きく人間学は余りに無力である。

二十一世紀の人間学は、新しい総合的な人間観を打ちたてなければならない。それは自然科学、社会科学、人文科学を綜合統一する人間学でなければならない。ルネサンス期、フランス革命期について、二十一世紀には第三の人間研究の集大成、百科全書の人間学の樹立が試みられなければならない。つまり全体の人間像が生み出されなくてはならない。十九世紀に発した諸学問の発展は細分化、専門化の極に達した。二十一世紀の学問はこれらを統合化するものでなければならないであろう。人間学こそがこの課題に解答を示さなくてはならない。人間とは何であり何であるべきかという問が新たに発せられなくてはならない。

5. 神と科学

ダーウィンの進化論が表われた時、キリスト教会側は激しくこれを批難した。そして進化論を長らく認めようとしなかった。たしかに進化論は旧約聖書に対する痛撃であった。なぜなら旧約聖書の創世記の中で、第六日目に神のなしたことについて次のように書かれているからである。

「神はこのように、人ひとをご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」

ところが進化論では人間は神によって直接創造されたのではなく、より低級な生物から進化してきたと言うのだ。しかしこのことによって神の存在が

否定されたのであろうか。たしかに旧約聖書の創世記は否定された。これはキリスト教会にとっては認めがたいことであろう。しかし今日になって考えてみると進化論によって神の存在が否定されたと主張する側も、この進化論を必死になって攻撃したキリスト教会側の両者とも、余りに幼稚じみている。神は宇宙を創造した時に、このような進化の法則を宇宙の内部に内在させておいたのだとすると、人間がより低級な生物から進化してきたと言うことが言われたからといって、神が人間を創造したという事実は少しも否定されない。最初から神は、物質→生命→精神→?という進化の法則を宇宙の中に内在させておいたのだ。進化が突然変異によって生じたとしても、少しも事情は変わらない。神は結果として人間が生じるように最初から定めておいたのだ。ここで信念や信仰の問題を持ち出そうというのではない。これは論理の問題だ。結局今になっても、神の存在を論理によって証明することは出来ないが、また神の存在を論理によって否定することもできないという従来の問題点は少しもクリアされていないのだ。

おわりに

ヨーロッパ人の思考は極端から極端へと揺れ動く。認識の源泉は感官のみである。(経験論)。いや感覚ほどあてにならないものはない。理性こそが不動の依りどころである。(合理論)。歴史は精神の自己展開で絶対理念に収斂する。(観念論)。いやそれは転倒した見方だ。物質の展開こそが現実の歴史を構成する。(唯物論)。進歩しているのは西欧の歴史のみだ。世界史とは即西洋史に他ならない。(ランケ)。いや野蛮人も文明人と同じ精神構造を持っている。西欧文明だけがすぐれているのではない。(構造主義)。人間は神によって特別に選ばれた存在だ。(キリスト教)。いや、遺伝子レベルでは人間も他の生物と変りはない。いまや人間は終焉した。(分子生物学)。ざっと以上のようにヨーロッパ人の思考は二極対立のうちに展開してきている。しかし人間学の立場からみると、そのどちらか一方をよしとしない。人間の認識は感官を土台としているものではあるが、また理性による認識もある。つまり人間は経験論的存在でもあるが、理性的存在でもある。通時的存在の面もあるが、共時的存在の面もある。他の生物と変らない性質も持っているが、他の生物から抜きんでたところも持つ存在でもある。要するに人間は複合的

全体的存在なのだ。今までの思考は人間の一面的存在を強調して突出させた。しかし21世紀の人間学は、これまでの人間のすべての思考を包括する、そして全体的人間観に基ずいたものでなければならないであろう。いわば存在論的人間学でなければならない。人間学は復興発展されなければならない。人間とは何であり、何であるべきかという問いに対して答えようとしなければ、新しい世界、新しい社会を創造することもできない。人間学の責任は大きい。人間は終焉したのでもなければ、消滅したのでもない。ただ人間が人間という原点に立ち戻ることが忘れただけなのだ。

[注]

本論中の引用文のテキストはほぼ岩波文庫に依った。